

令和元年度 「地域共生社会推進セミナー」 報 告



日 時:令和元年(2019年) 12月5日(木)

場 所:アイリス愛知 2階 コスモス

開 会 挨拶

愛知県社会福祉協議会 専務理事 竜橋 謙



本日は多くの方にご参加いただき、誠にありがとうございます。

まず始めに、今年は列島を縦断した台風が、広範囲にわたり非常に大きな被害をもたらしました。災害発生直後から現在まで、社会福祉協議会は全国のネットワークを生かして被災地に職員を派遣をし、災害ボランティアセンターの運営支援に当たっております。各市町村社協におかれましても、地元からボランティアバスを運行させるなど、独自の支援を展開していただいているところです。

全社協の調べによりますと、これまで、全国で延べ16万8千人を超える方がボランティア活動に参加され、被災地の生活再建に向けた大きな力となっておりますが、長野市をはじめ、甚大な被害に遭った地域においては、今なお、多くの方が支援を必要としています。

本日、ご参加の皆さまの中にも、何らかのお立場で被災地の支援に当たっていらっしゃる方もあらうかと思います。これまでの皆さまのご支援に敬意を表しますとともに、本会といたしましても、引き続き、被災地の支援に全力で取り組んでまいりたいと考えております。

さて、本日のこのセミナーは、平成22年度から開催していた「社会貢献活動推進セミナー」を昨年度から改編し、地域共生社会の実現に向けたつながりとアイデアの創出に寄与することを目指し、名称も「地域共生社会推進セミナー」と変えて開催することとしたものです。

今日の私たちを取り巻く社会状況に目を向ければ、「2025年問題」や「8050問題」など、挙げればきりが無いほどの課題に直面しているわけですが、こうした中、地域における生活支援や個別支援においては、様々な制度の活用とともに、ボランティアや住民同士の支え合いなど、インフォーマルな活動への期待が高まっています。

令和最初となる今回のセミナーのテーマは、『きづかう・しりあう・やってみる』といたしました。

本日は地域福祉が専門の、愛知教育大学の川島ゆり子教授をお招きし、今後、目指すべき社会の捉え方についての講話をお願いをしております。

続いて、社会福祉施設、企業、行政の立場から、地域で実践をされている活動事例をご紹介いただき、地域でのつながりを皆さまと一緒に考えてまいります。

そしてセミナーの最後には、新しいつながりが生まれることを期待して、ネットワークタイムの時間を設けました。

ご参加の皆さま方におかれましては、このセミナーを契機に、多くの方とつながっていただいて、地域での具体的な活動に取り組んでいただき、そして、その成果を、来年度のこのセミナーでご報告していただくというような、そのような“つながり”ができることを願っております。

このセミナーが皆さまの新しい出会いの場となり、また、今後の活動への参考となることをご期待申し上げまして、開会のあいさつとさせていただきます。

本日は最後まで、どうぞよろしくお願い申し上げます。

I 講話

『地域共生社会の捉え方に関する一考』

気遣い合える森の住人として。

愛知教育大学 教育学部 教授

川島 ゆり子 氏



私の専門は地域福祉ですので、この「地域共生社会」というテーマは、まさに私の専門のど真ん中というところなんです。今日は皆さまと共に、「地域共生社会」をどう作っていくか、共に考える時間を持ちたいと思います。

まず「地域」について、改めて皆さまと一緒に考えていきましょう。地域というところは、高齢の方ばかりが住んでいたり、子どもだけが住んでいるピーターパンのネバーランドのような世界があるわけでもありません。いろいろな世代の人たちが共に暮らしている。これが地域の姿だと思います。

でもそれだけではなく、地域共生社会にはもう一つ、重要な概念があります。いろいろな思いを抱えている方や障害のある方といった、いろいろな暮らしづらさ・生きづらさを持っている方も、地域の中にはたくさんおられます。不登校に苦しむ子どもや、仕事がストレスになっている会社員、阻害されている高齢の方などもそうです。

そういう方を排除するのではなく、さまざまな人たちが共に暮らしていく。それが、この「地域共生社会」の本旨ということになります。

この「地域共生社会」というコンセプトには、一つの重要なキーワードがあります。それは「参加」です。共生とは、単に共に存在しているということだけではなく、いろいろな生きづらさを抱えた方々も、社会のいろいろな活動に参加し、共に生きる。ここが大事なところだと思うんです。

その方が担える社会的な役割は、それぞれ異なるかもしれませんが、何らかの役割を持ちながら、社会に参加する。そのことを実現していくことが、「地域共生社会」だと思います。

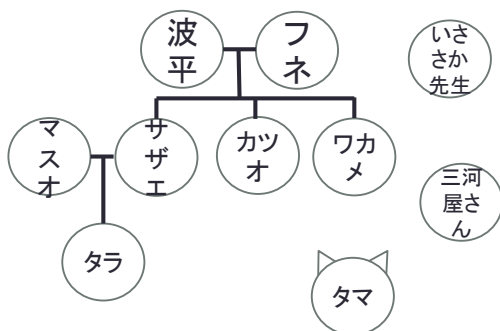
そういう意味では、地域の中でのさまざまな「つながり」「関係性」が、やはり大事になります。こういった地域の関係性で、何かモデルはないかと探したとき、パッとひらめいたのが、皆さんご存じの『サザエさん』なんです。

今、大学の授業などで『サザエさん』の話をすると、学生はみんなポカンとするんです。若者はテレビを見なくて、ネットでYouTubeを見たりしてます。それに『サザエさん』の世界って、若者には昭和のノスタルジーを飛び越えて、ファンタジーの世界なんです。

でもこの『サザエさん』には、社会の関係性を考える上で、いろいろなヒントが含まれていると思っています。

『サザエさん』の家系図を参照しながら、縁をつないでいく大切さを見てみましょう。

・かつての血縁・地縁のつながり



まず、波平さんとマスオさんです。この方たちは、会社という組織につながり、そして社会とつながっている。こういうつながりを「社縁」と言います。ちなみに波平さん、私はもう70歳ぐらいだと思ってたんですが、55歳の設定だそうです。実は現役バリバリのサラリーマンなんです。

サザエさんの家の隣には、伊佐坂先生という作家の先生の家があります。お隣同士で、生け垣で区切られていますが、生け垣がちょっと低いんです。そうすると、庭同士でお互いの庭から生け垣越しに話をして。時には伊佐坂先生が基を打ちに、波平さんの所を訪れて、縁側で

ばちばちと碁を打つ。こういうふうには、伊佐坂先生と磯野さん一家っていうのは、地域の縁、すなわち「地縁」でつながれているわけですね。ご近所同士のつながりというものです。

もう一つ、注目したいのは、三河屋さんです。地域のお店を営んでいる事業者さんが、ご商売でこの家とつながっているような縁。こういうところも、『サザエさん』の一家の物語の中から見えてきます。

そして、タマちゃんがあります。ペットの白いネコです。ネコのタマちゃんが、結構、いい味を出していて。例えばサザエさんがカツオを怒りそうなザワザワしたとき、タマがニャーって来る。場を和ます、緩衝材のような存在です。

地域の中にはいろいろな緩衝材があります。例えば、犬の散歩をしながら地域の子どもの見守りをする「ワンワンパトロール」というものがあります。そのワンちゃんはベストを着て、ワンワンパトロールってワンちゃんの背中に書いてあります。飼い主さん同士がワンワンパトロールで出会うと「こんにちは」って言いながら挨拶し合う仲になれる。

私も、ワンちゃんのジョリーちゃんが天国に旅立つまで、やっていました。誰も「川島先生」なんて呼びません。「ジョリーちゃんのママ、こんにちは」っていう感じです。イヌ同士のつながりだけで、互いにどんな家に住んでいるのか、名前も何も分からないんですけど、つながれる。それは、ペットでもお花でもいいんです。ほわっとさせる緩衝材を通じて、人と人とがつながれています。

こうした、地域にいろいろなつながりの契機があるというのが、『サザエさん』を通して見えてきます。

今はあまりないかもしれませんが、縁側もそうです。縁側の「縁」は、「えにし」って字が使われるんですね。日本の家は西洋の家とは違い、家の内と外がとてもハッキリしている造りになっています。ところが、この縁側だけは、内でも外でもないという場所なんですね。家の中に上がり込むわけではなく、そこでお茶を飲みながら、碁を打ちながら、何かしらの世間話をしながら、またじゃあねって帰っていくような、そんな場なんです。

ボランティアを研究しておられる関西の岡本栄一先生という方が、縁側を「なぎさ（渚）」と表現されました。海の中でも、砂浜でもなく、波が行っては戻るちょうど端境のところ。そういうところに、居場所を作るということは、とても大事なんじゃないか、ということです。地域の中にこのような「なぎさ」のような場所があると、いろいろな人が出会い、縁を紡ぐことができる。

地域の人の顔と顔が見えて繋がる場所があって、タマがそこに座っていてニャアって言ってる。そんな『サザエさん』のような場所が、かつてはあったということです。

今日ここに、いろいろな社会福祉法人の方が来られています。この中でも、地域の居場所提供ということで、コミュニティ・カフェの開催や園庭開放などをされている方々もたくさんおられると思います。社会貢献の方法について悩みも多いでしょうが、このような「なぎさ」の場の力を信じながら、場の提供をしていくことは、大きな社会貢献につながっていると思います。

もう一つのヒントとしては、三河屋さんです。もう今は、そういう商売をしておられる方はなかなかないと思いますけど。三河屋さんは「こんにちは」って勝手口から家の中にやってきて、「何か今日、ご用事ありますか？」って。そして注文、なくても全然 OK なんですね。でも、ひとしきりサザエさんと何かしゃべって帰ってくる。また注文があったらまた来ますねっていう。まさに訪問形式のニーズキャッチ、お届けサービスです。

今、ネット通販が広がってしまい、注文があったらクリックして、商品が手元に届くという世界になってきています。でも「何となく欲しいけど、どうしようかな？」ってときもあると思うんです。

これは、社会福祉サービスでも同じだと思います。例えば「介護のサービスが必要で、介護保険の認定を受けて、訪問ヘルプサービスを週2時間欲しい」と、最初から理解しているお年寄りの方は、なかなかいません。「何となくしんどい。もうお料理も、お掃除も思うように体が動かない。でも誰に相談すればいいだろう…」。そんなつぶやきの段階で、ニーズキャッチができると、重篤な状況に陥る前に支援を差し伸べることができるわけですね。

とはいえ、今ではこの三河屋さんのような仕組は、なかなか実現は難しい。オートロックのマンションなら尚更です。でも、例えば自動車ディーラーの方が、お車を納品した後で「お車の具合はどうですか？」ってアクセスすることもありますね。多分、高齢者のユーザーの方もたくさんおられる。高齢者のユーザーの方が、だんだんお車の運転が不安になって「運転免許をもう返納しよう」と決める前に、「何となく心配だな、でも車がないと困るな」って、つぶやいている期間がかなりあると思うんです。

そのつぶやきみたいなことを、例えば社会福祉の関係者が、相談窓口で電話を待つ状態は、なかなかニーズはつなが

らない。そのお宅にお邪魔したり、お電話をするなどのアウトリーチをして、ニーズをキャッチをできるっていう可能性は、事業者の方にはあるのだと思います。

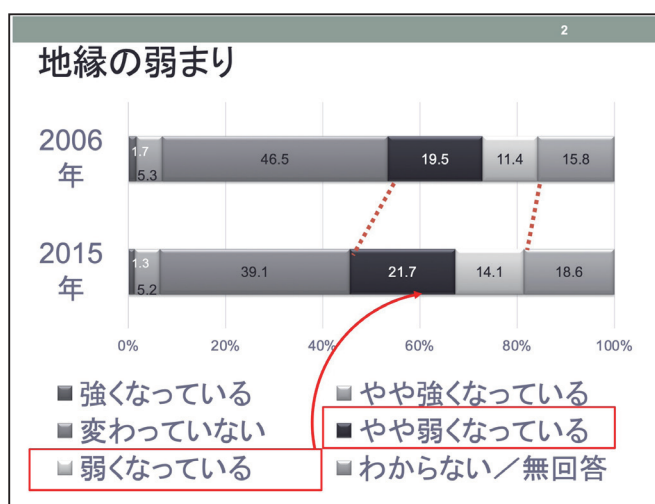
『サザエさん』に存在するいろいろなヒントを生かしながら、社会福祉法人や事業者、産業の関わり、ボランティアなど、それぞれの立場で何ができるか。この地域の中で、こぼれ落ちる人を、1人でも2人でも少なくするためには、自分たちの役割としては何ができるのかということ、それぞれが思い巡らしていく。行政任せ、あるいはボランティア任せということではなくて、「地域共生社会」というのは、地域に関わる全ての人がよってたかって何とかしよう、そういうものが「地域共生社会」のあり方であり、「地域共生社会」を作る大きな礎になるんだと思います。

とはいえ、「地域共生社会の実現をしよう」という声が高まっているということは、裏を返せば、今は「共に生きる社会ではない」ということだと思うんです。

いろいろな悲しい事件が、日々、起こっています。この愛知県域にもいろいろな場所があり、こぼれ落ちる人たちがたくさんおられるんだと思います。つい最近も、エアガンで子どもを撃つなんて考えられないようなことが起こりました。それは許されることではありませんが、子育てに悩み、どうしていいのかわからなくなったいたというのは、やっぱり家庭が地域で孤立していたんじゃないのかなと思うんですね。そういう意味でも、現実の地域社会はとても厳しい状況にある。これが現実だと思います。

データを見てみましょう。これは「地縁の弱まり」について意識調査をしたデータです。それによれば、地域のつながりが10年前に比べて、弱くなっていると感じている方が、どのくらいいるかという調査です。

2006年の調査では、「弱くなっている」と考えている人が30パーセントほどでした。それが10年後の2016年では、36パーセントに増えています。



今は2019年で、またさらに数字は広がっている。少なくともこの5年間で「地域のつながりが強くなった」と感じている人は、多分、この会場にはいらっしやらないと思います。

地域のつながりが弱くなっていくと、どんなことが表出するのでしょうか。地域のつながりには、階層があります。その階層の中で個人間のつながりが弱くなると、自然と社会とのつながりが弱くなる。それが孤立という現象につながります。一人の人が、誰にも相談できず、家に閉じこもってしまう。

私も今、マンションに住んでいます。6軒の小さなマンションですが、表札が上がっているところは1軒もあり

ません。これが現実です。家族同士のつながりが弱いということは、近隣関係の希薄化につながります。

世代間のつながりという視点でいえば、世代の分断ということが起こっています。世代間の分断で、とても大きな表出問題としては、選挙、投票行動があります。

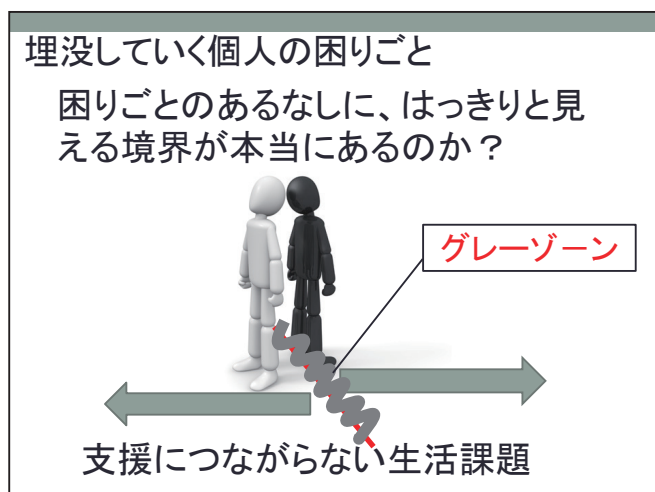
高齢者の方の投票行動は高い。しかし若い世代は、あまり投票に行きません。私にも20歳前後の子どもがいるので「選挙に行かないのか」と聞いてみると「行かないよ」って言うんですね。「高齢者の方の社会保障は手厚いけど、どうせ年金は貰えなさそうだし」って、諦め感みたいなものがものすごくある。いろいろなところで、世代間の分断が起こっている。それが社会全体に広がると、階層と階層の分断ということになると思います。また、「格差社会」ということが本当に叫ばれ、年収にも大変な開きがあります。

私たちは今、孤立だとか、世代感格差だとか、あるいは格差社会の中で生きている。けれども、「じゃあそれで良いのか？」ということですよ。格差社会というのは「こぼれ落ちる人がいる」ということです。こぼれ落ちる人たちの

存在は、このままで良いのだろうか。この社会はこのままで良いのだろうか。共に生きるとは一体、何だろうか。そんなことを、今、まさに問い直すべき瀬戸際に来ているのではないか。そう考えています。

孤立している人たちがたくさんいると、自分では「助けてほしい」と、言葉すら出せない状況になります。そうすると、困りごとがあるのかないのかハッキリと分からないと言う状況になります。グレーゾーンです。

本人から「助けて」という声を聞けないから、いまひとつよく分からない。「何か困りごとはありませんか」と、声掛けをしても、そういう方々は決まって「大丈夫です。何も困ってません。放っておいてください」と、言うんです。そうすると、支援につながらないことになります。このグレーゾーンの問題に対して、どうやってもう一步踏み込み、ニーズをキャッチしていくことができるのか。



「地域共生社会」というのは、単に「一緒に楽しく暮らしましょう」「みんなで共に生きましょう」というような、お花畑のような理想論を言っているのではありません。こぼれ落ちてる人が実際にいる。支援が必要だけれど、助けてと言えない人が実際にいる。その具体的な対応策が必要になるということになります。そうなったときに、今、漏れ落ちている人が、実際にどういう状況で漏れ落ちていくのか。社会保障の面から捉えてみようかなと思います。

かつては、社会保障が、この国でもとても豊かに存在していました。教育をしっかり受け、いい会社に入る。

一遍、会社に入ったらしっかり雇用があり、福利厚生も充実し、終身雇用も当たり前の時代がありました。そして退職後の社会保障には、年金があります。ですから生活保護という、救済のための社会保障というのは、本当に困った人、生活のリスクが起こったときのための施策だったわけです。そういう社会保障の仕組みがありました。

ところが今では、そこからこぼれ落ちる存在がたくさん出てきました。社会保障費も、日本の財政を圧迫しているということで、縮減の対象の極みです。

教育の機会を十分に受けることができない「子どもの貧困」が、今、大きな問題になっています。学校の義務教育がしっかりあったとしても、学力向上のために塾に行ったり英検を受けたりします。しかし貧困に直面している子どもはそれができず、ダイレクトな教育格差になります。

雇用に目をやれば、正規雇用・終身雇用から漏れ落ちていく、非正規雇用の方が今、たくさん増えていってます。若者の中で「自分が生きていくだけで精いっぱい、結婚はできない」と言う若者がいっぱいいるんですよ。

そして、高齢者の困窮や、単独世帯も増えてきていますよね。無年金の方はたくさんおられますし、年金も月6万6千円では、とてもじゃないけど生活できません。人生後半の社会保障から漏れ落ちている人です。

この現象は地続きなんです。子どもの貧困が、その子の将来の職業選択に当然、響いてくる。それで正規職員に就けなかった。そして年金を自分で払うことができず、無年金状態になる。そして高齢化していくと、困窮世帯に陥っていくということになります。

現代日本の社会保障は、ピンと張った力強い網であるはずの網の目がどんどん緩くなって、漏れ落ちる人がたくさんいるのが現実です。それは全世代にわたり、しかも地続きで連続性を持っているのが状況なんです。

まるで、ゆるゆるで本当に危なっかしい網の上を歩くような人生の綱渡りです。誰がいつ、そのセーフティーネットから落ちるかも分からない。こういう不安定な社会を「すべり台社会」と表現したのが、湯浅誠さんという人です。「もやい」というホームレスの方の支援団体を立ち上げて、今、東京大学のほうで教鞭を執られています。

誰しもがすべり台社会の中で漏れ落ちていく可能性がある。つまり、排除、あるいは社会的孤立という状況にある人は、特別の存在では決してありません。地域の中で、誰しもが、このすべり台社会の中で漏れ落ちる可能性を持っています。それを人ごとだ、自分とは全く関係がないと力強く言える人は、ほとんどいないんじゃないかと思います。

だからこそ、私たちは、「地域共生社会」という理念を掲げながら、そこに向かってどう進んでいくかということを、実現性を確保しながら、少しでも手だてを打っていかないといけないのです。なぜなら、自分の暮らしにも直結しているのですから。

今、「地域共生社会」の取組が、いろいろな政策の中で進んでいます。2019年7月に、社会保障審議会の部会として「地域共生社会推進検討会」が作られ、地域共生を具体的にどう進めていくべきかという話し合いがなされています。

ただ、この議事録も読みましたが、なかなか具体的なモデルが出ているわけでは決してありません。「その市町村ごとに、その地域に合った仕組みづくりをしてください」というのが、今の厚労省のスタンスです。

地域をつくる人たちというのは、厚労省や国ではなく、その地域の住民、地域に関わる専門家の職員、あるいは地域に関わる事業者の皆さんに他なりません。いろいろな人たちが、わが町・わが地域をどう作り上げていくんだということを、みんなで考えていく。そういうことが、やっぱり求められていることになります。

社会保障改革で、社会福祉法の改正が入っています。そこで注目すべきキーワードとして、一つは「世帯」という言葉がこの法律の中にしっかり書き込まれました。地域の中で漏れ落ちる世帯・家族がある。家族丸ごと支援をしていると強調していることが、大きな特徴です。

高齢者の方の介護問題は、その家族が支えている。介護によって、その家族の生活が、介護離職や給料が下がったりして犠牲になるかもしれない。そういうことを考えると、その世帯を丸ごと支援していく必要性があります。

また、地域社会からの孤立ということに着目したのも注目すべき点です。サービスの提供だけが、地域福祉ではありません。地域での孤立に、どう立ち向かっていくか。ここも地域福祉、共生社会の大切な仕事だということです。

とはいえ、『サザエさん』のあの時代を、もう一回カムバックするわけにはいきません。だからこそ、『サザエさん』の時代にヒントを得ながら、縁側がないなら縁側に代わる場所をどう作るか。地域のつながりが自然発生しないなら、どんな仕掛けをしていくか。三河屋さんのご用聞きができないなら、その代わりに人のニーズをキャッチできる商売の仕方は何があるのか。このように、いろいろな工夫や仕掛けから、新たな形でもう一度、再構築し直すということも大事になってくると思います。それを、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

「地域共生社会」を目指す方向性は、すべての人が対象です。困りごとがある人も、いろいろな悩みを抱えた人も、すべての人々が、地域で暮らして、生きがいを共にづくり、高め合える社会です。

その前提には「多様性」が重要です。年齢や性別、障害のあるなし、いろいろな人がいてもいい。これから考えていけないといけないのは、多国籍です。いろいろな人たちが、これから働き手や学生として来日されるでしょう。いろいろな国籍の人たちも共に、この地域で生きるために、一緒に参加や協議の場をつくるのが大事なことです。

また、LGBTのような性的マイノリティーについても、やっぱり考えていかないといけない。ゼミ生に教えてもらったんですが、LGBTの方が住居を変えるときはとても困るそうです。同居人は夫婦でもないし、兄弟でもないのに、入居を拒否される可能性が高いと聞きました。また入院時、LGBTのカップルは親族の同意書にそこにサインをする権利がないということも聞きました。

いろいろなところで、多様性の存在が拒否される場合が多々ある。地域社会で、どうやって多様性を担保しながら、地域づくりを共にしていくことができるか。そのためには、その人たちも一緒に話し合いに参加していただければ、地域づくりは当然できません。

この場合の地域づくりというのは、かなり積極的な意味を持っています。そのために、住民と専門職が協働する場、一緒に話し合う場を、地域の仕組みとしてどう作っていくかです。そんな場所を提供できる施設の方も、事業者の方も、たくさんおられるでしょう。また、そういう機会やチャンスを働き掛けてくださる社会福祉協議会の方も、ここには多くいらっしゃると思います。自分たちが関わるとしたら、どう動くかということを考えていただきたいと思いますね。

「自分や家族が暮らしたいと思える地域」。「地域で困っている課題を解決できる地域」。そして「一人一人を支える地域」。こういうことが、検討会の中でも定義されています。

特にこの「一人一人を支える地域」ですね。排除されがちな方、もしくは、地域の中で声も出せないような人も含めての「一人一人」。この部分が、やはり大事なところだと思います。一人一人が地域で暮らすことは、憲法で保障された権利です。憲法 13 条には「幸福追求権」という条文があります。ただ暮らし、命を永らえて暮らす基本的人権だけではない。もう一歩進んで、幸せな状況を追求する権利を持つ。そういうことも保証する地域社会を実現するためには、何をしていったらいいか、ということです。

そのときにもう一度、考えたいことがあります。それは「声に出せない人がいる」ということです。ではその人の困りごとや悩みごとを、どうキャッチするか。

事業者の方が、いきなりその人の家の中の困りごとが分かるわけではない。また専門職の方も、地域の一件一件をつぶさに毎日、尋ね歩けるわけではない。その中で、気付きやすい存在が、近隣なんですね。『サザエさん』でいう伊佐坂先生が存在です。もちろん、悩みごとの全容を知っているわけではないけれど「今まできれいにお花を整備されてたのに、最近、雑草がいっぱいだわ」というような、ちょっとした「何かおかしいぞ」という気付きを、近隣の方がしてくださっている可能性がある。

そんな近隣の気付きが、専門職や支援に届かないと、その人は辛い状況のまま、自ら声も上げられず、気力も体力も衰えていってしまうという現実があります。

専門職から見えない生きづらさとして、典型的な事例は「引きこもり」です。特に中高年の引きこもりは、今、何十万人もいるといわれています。ごみ屋敷と呼ばれるようなケースも、虐待のケースもあります。

でも一方で、支援をするとまではいかないけれど、その地域で、何とはなしに「大丈夫かな？」って気にしてくださる方は、実はおられるんです。そこに、どうチャンネルをつないでいくかということです。

実際に、近隣の「気付き」が地域で活動しているボランティアの方につながり、近隣の見守りのようなことが実現している事例もあります。

また、地域の事業者の方の「気付き」というケースも結構あります。例えば町の電気屋さんで、電球が切れたと連絡を受けて交換に行ったら、スイッチが入っていなかっただけとか。それで認知症の進行に気付いて、地域包括支援センターに連絡して下さったり。コンビニの店員さんが、おばあちゃんが最近、お弁当を 3 つも 4 つも同時に買うのでおかしいなと思い、それを社協の職員の方に伝え、認知症が進んでいることが分かったとか。いろいろな事例があります。

近隣の気付きというのは、住民の方だけではなく、その地域に根付いていらっしゃる事業者の方にも当てはまるということだと思います。

いろいろな気付きがありますが、そのままでは気付きっぱなしで終わるので、そこをどう共有していくかというのが、重要なポイントだと思います。近隣の住民と事業者の方が、気付きを共有する。あるいは近隣と地域のボランティアグループで、気付きを共有して、じゃあチームで見守りに行こう、というような活動につながっていく。

一人で気付き、一人で動くのは、少し気が重いですよね。けれど、その気付きを共有でき、集約される場があれば、そこから支援につながる可能性が広がっていきます。

一人で気付くには、重い荷物です。それを押しつけるだけではなく、ちょっとずつ分け合う。そういう場の存在が、とても大事だと思っています。

地域の助け合いとは、支援を一方的にするのではなく、相互の話です。支援を受けられる力、時には助けられてもいいんじゃないかと思える力。これを「受援力」といいます。「支援力」と「受援力」の両方があってこそ、地域の助け合いになるわけです。

こういう、地域の中でいろいろな助け合いが、当たり前、自分は助けられてもいい、お互いさまだよねと思えるような地域を、これからどう作り、どう実現していくか。それが今、大切な視点なのだと思います。

そういう意味では、コミュニティーの中での意識ということも、働き掛ける対象になります。

支援に対してサービスを提供するだけでは、社会福祉ではありません。社会福祉とは、地域のいろいろな思いに働き掛けていくものなのです。「この地域に住んでよかった」というのが、現時点での地域での暮らしです。そして「これ

からもここに住み続けたい」、「子どもの世代に継いでいきたい」というのは、未来の話になります。

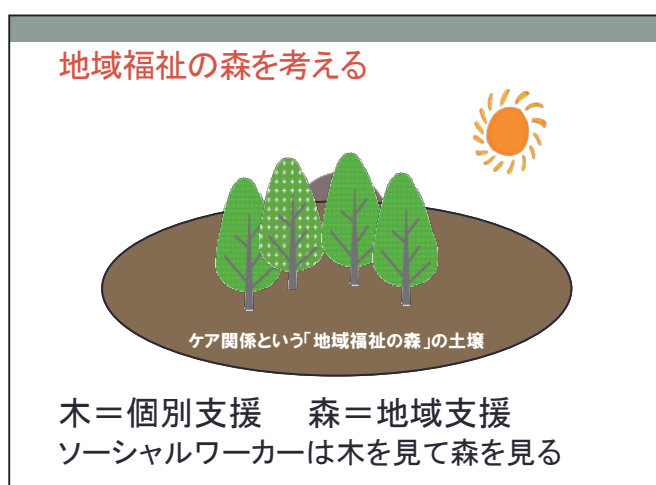
地域の継続が困難になってくる「限界集落」も今、各地で発生しています。愛知県でもそうです。

これは栃木県日光市の事例ですが、その地域の祭りを、地域の人たちが誇りに思っている限界集落がありました。祭りを何とか継続させたいが、若者がほとんどいなくなっている。そこで、社会福祉協議会の職員の方が、少し離れた地域の中学生に声を掛けて中学生ボランティアグループを結成し、祭りの伝統を地域の長老の方に教えていただき、祭りの踊りを中学生が踊るという交流を今も続けているそうです。

「この地域に暮らす」という誇りをどうつないでいくかということも、とても大事な「地域共生社会」の視点なのかなと思います。

今日は、「地域共生社会」をどう捉えるか、捉え方の一考というタイトルをいただいています。私は、「地域」を「森」に捉え直してみてもいいかなと思っています。「地域福祉の森」を考える、ということです。

一本一本の木があります。この木の中には、悩みを抱えて孤立している木があるかも知れない。でもその木は、1本だけで森という地域に生えているわけではないわけです。



そこに働き掛けるソーシャルワーカーや事業者といったいろいろな方たちが、その1本の木の困りごとを見るだけでは、その木を何とかしようとするだけで終わってしまい、地域全体にはつながっていきません。

しかし、その1本の木をしっかりと見ながら、子育てに悩んでるお母さんが他にもいるのかな、もうつぶれそうになっている介護家族の方もいっぱいいるのかな、他の木々も視野に入れながら、森全体として見るようにします。

そして考えていただきたいのが、その木たちが生えている「地域福祉の森」の土壌です。この地域は、悩みを持っている1本1本の木を支えられる豊かな土壌だろうか

かということです。そうすると、地域の意識への働き掛けや、つながりをつなぎ直すというような、土壌への働き掛けも、もちろん大事です。

また、土壌が浴びる日光ももちろん大事ですね。国から下ろされている制度や政策は、もちろん大事なことです。あるいは、地域の木々に吹き渡るような風のような存在も、とても大切なことです。地方自治体の中で、どんな風をこの地域に吹かすことができるのか。制度、政策として下りてくる太陽の光を、どう自分たちの地域に合わせてアレンジできるのか。木々が1本1本生えている土壌を、どう豊かにできるのか。どうしたら、つながりの豊かな地域にすることができるのか。

こういうことを考えながら、木を育てて、森を育てていく。その営みが、「地域共生社会」ということにつながっていくと思います。

ここに“輪っか”を描いています。一人ひとりの悩みを、近隣の方や事業者の方がしっかりと受け止め、その人をみんなで支えるネットワークをつくっていく。でも、この人だけじゃない。他にもこの悩みを抱えている人はいるんじゃないか。そういった、個別からの普遍化をしていきながら、どうやって地域の中で悩みを抱える人たちを支える仕組みとか場を作っていくことができるのか。

それを支えていくためには、いろいろな人たちの協力、事業者の方々の協力が必要です。行政の方々の協力も必要です。そうして、プランニングを立てていきながら、制度化につなげる。そういうことを一つひとつ繰り返しながら、「地域福祉の森」を豊かにしていく。こういう取組こそが、地域共生社会であることだと思います。

特に事業者の方には、地域の1本1本の“困りごとの木”をしっかりと見つめていただき、「うちならこういうことができるよ」とお声を上げていただき、そこからネットワークが組まれて、制度化につながっていく。そういう道筋が、

とても面白い発想、豊かなつながりに成長していくと思います。ぜひ、そういう可能性を、考えていただければと思います。

最後になりました。声が出せない状況に対して、どうやってアンテナを張っていくことができるか。専門職だけでは足りないわけです。いろいろな事業者の方々や施設の方々にご協力いただきたいと思います。

課題が複雑で、重なり合う当事者の現状に対しては、いろいろな人たちがその人の思いを聞き、課題を解きほぐす必要があります。しかし1人ではその荷物を担えないので、どうやって担い合えるか。

近隣の人たち、福祉の専門職、行政の力、事業者の方。あらゆる人の協力が必要です。いろいろな力を合わせていく。当てはまるサービスや資源がない状況に対して、サービスや資源ないので「ごめんなさい」ではなくて。買い物難民の方がおられ、買い物に困っていらっしゃるなら「うちに車が余ってるぞ、運転できる人がいるぞ。モビリティとして協力できることはないか」と、新しいサービスを作り上げることができるか。こういうことが、1本1本の木を支える「地域共生の森」につながっていくんだと思います。

そういう意味でも、いろいろな業種の人たち、いろいろな立場の人たちが、話し合いをして、自分たちに何ができるかということと一緒に考えながら、新しいものを作るチャレンジが、これからの地域共生社会だと思います。

今日は、この後で「ネットワークタイム」があり、皆さんが顔つなぎをしたり、名刺交換をしていただけるような機会があるとお聞きしています。ぜひ、そういう形で、いろいろな方とつながりながら、地域の中で、新しいものをつくっていきましょう。

『サザエさん』の時代に逆戻りはできないけれども、新しい「地域共生社会」の形を、みんなで考えて作り上げていく。そういう営みがこれからも進むことを、愛知県の中で期待させていただきまして、私のお話を終わらせていただきたいと思います。

どうもご静聴ありがとうございました。

プロフィール

関西学院大学博士課程後期課程満期退学 博士（社会福祉学）
日本福祉福祉学会理事、日本福祉教育・ボランティア学習学会理事、日本社会福祉学会学会誌編集委員
愛知県社協コミュニティソーシャルワーカー養成講座講師、大阪府地域福祉コーディネーター養成研修講師、その他講師活動や市町村での審議会委員等を多く務める。
『地域を基盤としたソーシャルワークの展開』（単著、ミネルヴァ書房、2011）『地域再生と地域福祉—機能と構造のクロスオーバーを求めて—』（共著、相川書房、2017）『しっかり学べる社会福祉③地域福祉論』（共著、ミネルヴァ書房、2017）『持続可能な地域福祉のデザイン—循環型地域社会の創造—』（共著、ミネルヴァ書房、2016）他

シンポジスト 事例発表【1】

家庭・子どもを孤立させない保育所等の取り組みについて

社会福祉法人 明照保育園 理事長 中島 章裕 氏



戦前から農繁期の託児所として開設されてきた本園は、当時、どなたでもおいでくださいという看板を上げていたそうです。そして、明照保育園として、昭和28年に創立されました。

心身ともにたくましく、思いやりのある子どもを育てることが、創立以来の本園の保育・教育目標です。特に昨今、地域社会のいろいろなつながりの弱さにより、孤独な中での子育てが困難になっています。地域社会の足りないところを補って、子育て環境を整え、親子の健全な成長を図ることを大切にしています。

随分前から障害児指定園になったのも、児童クラブや不登校支援を始めたのも、この理念によります。

本園は、ずいぶん前より、子育て支援に力を入れてきました。園庭開放や親子広場には、毎回40組以上の親子の参加があります。なぜこのような活動をするようになったかというところ、ここにこの開設当初に見学をさせてもらったところ、親子同士の交流が少ないことに気付いたからです。何十組も親子がいるのに、一緒に関わって遊ぶ親子が少なく、皆さんバラバラに遊んでいる感じでした。そこで、保育園の子育て支援の経験から、親子だけで遊ばせるのではなく、保育士として少し手助けするだけで、随分と雰囲気が変わることも分かりました。ちょっとした手助けがあれば、子育てを楽しめるお母さんはたくさんいます。反対に、そのちょっとした手助けが得られないために、子育てに負担感を感じているお母さんもたくさんいます。

月1回の土曜日には「なかよし保育」と称して、この日は園児だけではなく、地域の小、中学生や、お年寄りなどのボランティアが、いろいろな遊びのコーナーで交流できる場を提供しています。ここでは子ども食堂の一環で、学校から紹介のあった小中学生の子たちは、給食費が無料となっています。

中学校3年生との保育交流は、もう30年近く続いています。大人と子どもが半々のこの時期に、今やなかなか触れることの少なくなった幼い子どもと肌で触れ合うことは、将来、自分が親になっていくことを全身でイメージする貴重な体験ではないかと毎年思っています。本園の職員の中にも、この保育交流に来ていた子が何人もいます。

地域における広域的な取り組みとして、平成26年度6月より、毎週木曜日に「子ども食堂おとなりさん」を本園で行うようになりました。現在は毎回40人前後の利用があります。本園は昔から子育て支援や、育児相談に力を入れてきましたが、みんなで一緒に食べるだけで、自然と笑顔になり、心が温かくなるのを感じます。

貧困対策や子どもの居場所づくりとして全国的に広まっている子ども食堂ですが、経済的なものに限らず、孤独な子育てや、時間に追われた日々のストレスを軽減する、大きな意義があることをやってみて強く感じました。

援助を必要としている子どもや、一人親家庭といった優先順位がありますが、午後6時すぎのお迎えの家庭や、一度、家に帰ってから再び晩ご飯を食べに来る親子もいます。子どもだけではなく、食事をしながら、職員や保護者同士でも楽しい会話が交わされます。

毎晩、子どもと自分だけでは息が詰まることがあると漏らす家庭にとって、木曜日の夜は、お互いの息抜きの日としても活用されているのです。

今後の展開としては、社協や民生、児童委員さんとの連携も必要だと感じています。福祉分野でさまざまな活動を行い、情報を持っている社協や民生、児童委員さんとの連携は必須になってくるでしょう。現在は、社協さんのフードバンクや、地域の企業、農家からの援助も始まりました。

7年ほど前に、豊橋市で4歳の女の子が、親のネグレクトにより衰弱死した事件がありました。この家庭は子どもが2人いたのですが、小学校にも保育園にも行っていませんでした。近所との付き合いもなく、そもそも近所の人たちに聞くと、子どもがいたことさえ知らなかったんだそうです。

この家族が住んでいた場所は、本園から直線距離でいうと300mぐらいの所です。こんなに近くに困っていた家族がいたのに、私たちは気付くことができませんでした。

私たちはアフリカの飢餓で苦しむ子どもたちや、災害によって苦労している人たちには、見えていて同情もしますが、地域の子どものことは、意外と見えていないということです。「見えない貧困」という言葉があるように、現代、貧困や困っている人は見えにくくなっています。気付いたとしても、安易に親や家庭のせいにして納得してしまっているかもしれません。ひょっとしたら、身近な地域のことには、気付こうとしない、見えないようにしているといった側面もあるかもしれません。

気付こうとしなければ、見ようとしなければ、何も知らないままこの世界は進んでいきます。ネグレクトで亡くなった4歳の女の子に、私たちは何もすることができませんでした。その反省を踏まえて、園として何ができるだろうかと常に考えてきました。まだまだ手探りの状態ですが、本当に少しずつですが、手応えも感じています。

シンポジスト 事例発表【2】

まちイチ活動の取り組みについて

名古屋トヨペット（株）総合経営企画室担当 副課長 豊嶋洋史 氏



始めに、名古屋トヨペットについてご紹介をさせていただきます。名古屋トヨペットは「NTP グループ」という 15 社ある企業体の一つです。主にトヨタ自動車から車を仕入れて、クルマを販売する。もしくは整備を行うということを中心とした、車屋として事業を行っています。

この NTP という言葉は「Nice To People」「人に素敵を」というグループ全体を通した理念です。その中の「人」というのは、お客さまであり、地域社会であり、社員とその家族のことを表しています。

また、私どもの経営理念の中に「車社会の未来創造に挑戦し、地域の一員としてその発展に寄与する」という一文があります。地域との関わりをととても大切にしている会社でもあります。

それでは本題の地域活動です。ディーラー、販売店は、土・日曜にイベントを開催して集客を行いますので、相対的に平日は空いています。

一方で、地域にはカルチャースクールなどで人に何かを教えたいが、会場がないという理由でお困りの方がいらっしゃる。そこで名古屋トヨペットとして、平日のショールームや会議室を、地域の方々にご利用いただくことで、地域の方が集う場所にできるのではないかと考えました。

そして、2010 年にまち一番のクルマ屋を目指す活動、通称「まちぐる」ということで開始しました。また、NTP のグループにはトヨタホーム名古屋やトヨタレンタリース名古屋などさまざまな事業があり、2017 年にはグループ全体を巻き込んで「まちイチ活動」へと進化させてまいりました。

今回は、名古屋トヨペットの「まちイチ活動」の具体例を挙げさせていただきます。平日日中の活動で、女性の参加者が非常に多いです。小物作りやフラダンスなどの会場として使っていただいています。最近の流行りとしては、オカリナ教室やヨガ教室なども、地域差はありますが多くなっています。珍しいところでいくと、健康吹き矢教室もあります。後は一部、社会福祉協議会さんからお問い合わせがあり、高齢者の「わくわくサロン」の会場として使っている例もあります。

2010 年の 4 月に、3 講座でスタートしましたが、口コミなどで爆発的に広がり、昨年度は延べで 1 万 1 千講座が開催されました。1 つの講座で、生徒数としては大体、最大 10 人前後。昨年度の延べのご来場者数で見ますと、延べで約 8 万 1 千人の方がお越しいただいております。この「まちイチ活動」を通して、当社とご縁がなかった方にも、お車や携帯電話の購入などにつながっております。また、フラダンスの講師からは、レッスン中に車の点検を受けることができるので、大変便利だというように、利用者様にもメリットがあることも伺っています。

今年 9 月、ウイंकあいち（中村区）で「まちイチ発表会」というイベントも開催しました。日頃、名古屋トヨペットの店舗をまちイチ活動でご利用いただいている方々に発表の場を提供し、モチベーションアップに繋げていただこうと企画しました。

56 の教室が作品展示され、また、武道やフラダンス、オカリナなど 20 の団体が発表され、約 3 千名の方にお越しいただきました。

名古屋トヨペットのお店に来ていただくことが主旨の「まちイチ活動」でしたが、今では、店舗のスタッフが外に出て、地域に出て活動を展開しています。具体的には、地域のイベントや夏祭りのお手伝い、小学校の通学路の見守り活動などです。お店単体での活動ではなく、その地域の社会福祉協議会さんや青年会、警察署等と一緒に連携して活動を行うことで、仲間意識や活動に対する共感が生まれています。今後とも、地域にとって、ただのクルマ屋ではなく、地域の一員としてお役に立ちたいと思っています。

シンポジスト 事例発表【3】

行政と社協による地域活動の立ち上げ支援について

豊田市役所福祉部福祉総合相談課 主査 江崎 崇 氏



豊田市では平成 29 年に「健康と福祉の相談窓口」という相談機関の窓口を作りました。そこに、市の保健部局の保健師さんや私どもの福祉部職員、あと社協さんが、事務室で机を一緒に並べて業務をしているという、全国的にも珍しい体系で取組を行っています。

今、私は、豊田市の中心より少し南の、人口が多い所で活動をしています。そこでの主業務は大きく 2 つあります。1 つは、「個別支援」です。最近「8050 問題」など、高齢者や障害者の問題も昔よりも複合化・複雑化している問題が多く、タテ割りでは対応しがたい問題がかなり増えてきました。そこで、行政だけでなく、社協さん、地域の事業者さんも巻き込んで、住民の全部の困りごとを聞くという体制で、個別支援を行なっております。

もう一つの大きな柱は、「支え合いと地域づくり」です。そこに住んでる住民や民生委員さん、その地域にある企業さんや店舗さんなど、地域を構成する大切なメンバーやセクションを巻き込みながらやっています。

この「個別支援」と「支えと地域づくり」の 2 点を推進しながら、豊田市の地域共生社会の実現を、豊田市の行政と社協さんとともに、最大の命題として目指しています。

では、実際に何をやってきたか。取組の一つとして「若林お助け隊」の立ち上げを紹介します。

始めは平成 28 年、自治会長や区長さんが県外のどこかの市を視察して、「自分たちの所でもやれないか」と、話し合いがスタートしました。当時は私ども、関わりが薄く、地域の方のみで協議をしてたんですけど、何回か打ち合わせをするものの、あまり進まないという状況が続きました。そして平成 29 年に、健康と福祉の相談窓口を作ることになり、一緒にやりませんかとお声かけをいただいて参画しました。そこで、行政や社協のスキルを集めて、最終的にはその年度中にはお助け隊の設立総会を実施し、翌年度の 7 月から活動を開始するところまで持っていくことができました。

お助け隊の発足時におけるポイントを説明します。

1 つは、市や社協さんが福祉に関する地域づくりを推進していく役割を担うような組織改編、そして社協さんにコミュニティソーシャルワーカーを置くといった形づくりが大きかったです。

もう 1 つは、地域が区長さんをはじめとする住民の方から「自分たちで何かできないか」という認識から始まったということです。あとは、豊田市では平成 26・27 年ぐらいから「生活支援コーディネーター」や協議会などが設置されています。地域包括支援センターが事前に介入していたので、話し合いの場が既にあったというのはラッキーでした。

共働（※）の内容のポイントとしては、行政や社協さんが、始めに関わるという入り口をつくる以上、継続して参加をしていくということです。お助け隊は結成から活動するまでは、1 年以上かけて毎月の定例会などで顔を突き合わせて、話をしていたような状況です。

重要なことは、「地域主体」になるように土台を作ることと、市や社協さんはあくまで主役ではなく、地域で主役である住民の後方支援・伴走支援だという部分を認識することです。お助け隊は当初、25 人ぐらいからのスタートでしたが、1 年経った今では 50 人弱ぐらいの活動者がいます。地域全体の活動者は明らかに増えたと思います。

また市の個別支援の目線でいえば、簡易な支援ならお助け隊にお任せできるなど、支援ツールとして使えるようになったというのが、非常にありがたいなと思います。

お助け隊を作ったことで、他の地区でもやってみたいという人が視察しに来るようになりました。このようにループ化する形が生まれて、他の地域の活動支援につながったかなと思っております。

市や社協さんが大切にしていることは、市や社協による援助の業務体制や役割をしっかりと構築することと、地域に頻繁に顔を出して情報収集や意見交換に参加することです。また市や社協さんは、地域に何を求められ、何ができるかということをしっかり把握することです。

あまり強くは言えませんが、どこの地域でも反対する人は絶対出るんです。反対の声が多い中で始まるときは、地域で無理のない範囲でできる部分からスタートすれば、問題はかなり減ると思います。いきなり高いハードルを設けるのは難しいと思っています。

今回のお助け隊の事例は、どちらかというと高齢者向けの取組です。しかし今、豊田市でも子どもの貧困対策に非常に力点を置いているので、子どもに対する困りごとの支援も地域を巻き込みながら実施しているところです。

※通常、共働の「共」は、協力して働く「協」だが、豊田市では「共に働く」と書いて「共働」としている。

シンポジウム（意見交換と討議）

■コーディネーター（司会）

愛知県社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会 委員長 鈴木 盈宏
（公益社団法人スペシャルオリンピックス日本・愛知理事長）

■助言者

愛知教育大学 教育学部 教授 川島 ゆり子 氏

■シンポジスト

社会福祉法人明照保育園 理事長 中島 章裕 氏

名古屋トヨペット（株） 総合経営企画室担当 副課長 豊嶋 洋史 氏

豊田市役所 福祉部福祉総合相談課 主査 江崎 崇 氏



鈴木●3人の方から事例報告をいただきました。最初の中島さんの発表の中では、民生委員や児童委員などの協力をもっといただきたいとか、企業の支援もほしいとか、いろいろな話がありました。中島さんの発表について、豊嶋さんと江崎さん、ご質問があればお願いします。

豊嶋●子ども食堂をスタートされた当初は、スムーズにはいかなかったんじゃないかと思うんです。何か裏話的なものがあれば教えていただけますか？

中島●保育園は自園調理が基本なので、調理員さんもいるし、調理室もあるわけです。うちの園は大規模園で、毎日、職員と園児を入れれば300食くらいは作っているのですが、夕方に30食～40食を作るというのは、大したことではありません。それよりも、当初に役所で言われたのは、保育園は乳幼児の施設であって、園児が使うために補助金が入っている。だから地域の人のためじゃないと言われ、その部分はちょっと壁でした。しかし、お陰様で国の方から「社会福祉法人はもっと地域貢献に力を入れてほしい」という後押しがあり、それを受けて役所も、子ども食堂に対して理解を示すようになり、すんなりと話が進むようになりました。

鈴木●豊嶋さんは企業の立場で「まちイチ活動」をお話していただきました。それについて、他の方から聞きたいことなどはありますか？

江崎●名古屋トヨペットさんの活動は新聞で拝見することもありまして。その記事に出ていた「試乗車を活用した高齢者送迎活動」は、どんな出発点があり、今どのようになっておられるのかお聞きしたいのですが。

豊嶋●出発点としては、その店舗の店長のお母さまが、ちょっと足を悪くしてしまい、楽しみにしていた集まりに行けなくなったということが出発点でした。これは多分、地域の中で他にも同じことが起きていると思いました。そこで試乗車を使い、足に困っている高齢者の方を、サロンに送り届けることはできないだろうか、市役所や社協さんに相談したのがきっかけです。

例えば、白タク行為に当たらないかとか、各方面と調整をしていますが、運送法に関しては、何もお金をもらっていないのでクリアになってます。ただ一方で、本当に先月の話ですが、社協さんが愛知県から「旅行業法に抵触する恐れがある」と指摘を受けました。ということで、お互いクリアになった状態でまた再開しようと、いま社協さんの方で、いろいろと調整を行っていただいているところです。

鈴木●実は私も、以前勤めていた会社で、運転ボランティアで関わらせてもらってました。そうしたら、タクシー会社から「商売の邪魔するな」って文句が出てしましましてね。良かれと思ったことが全部良いということではなく、いろんな角度から見ていくことは必要ですね。

中島●こども食堂をやり始めると、行政や保健師さん、学校などから「うちでもやりたい」と問い合わせがあります。しかし、続く場合と続かない場合があります。ただ周知しただけでは来ないし、担当が連れてくるのも手間がかかる。豊田市さんはどうですか？

江崎●先ほどの発表の最後に「子どもの貧困対策に力点を置いていく」と、申し上げました。豊田市では、昔は2カ

所くらいでしたが、今、本年度時点で14カ所ぐらいには増えています。特に貧困などの課題を抱えている人たちを呼ぶ点に関しては、かなり難しい問題も抱えているところですよ。

ただ、中島さんがおっしゃるように、簡単に周知だけでは足を運んでくれないというのは、私どもも重々承知しております。そして、連れて行くところまでは現実に豊田市としてはやっています。

かなり失礼な言い方ですが、普段から個別支援に力を入れておらず、とりあえず情報は投げたよ、行政がやるのはそこまでだというスタンスを取っているとしたら、結果的にそこから進まないだろうと思います。行政による個別支援でどこまでやるのか、その情報提供での課題の認識が違いになると思います。



豊嶋●今年に入って豊田市さんといろいろ連携をしたいなと思い、何度か豊田市役所に伺っています。街づくりに関して、企業と何かタイアップしてるような事例はありますか？

江崎●先ほどの高齢者の送迎の話を読んだので、ネットヨタ中部さんのある店舗のエリアマネージャーさんの所に、話を聞きに行ったことがあります。

行政としては「仲間を増やしたい」という認識が強いので、具体的にこれをこうしてほしいという話ではなく、何となく幅広く「一緒に地域づくり、地域の困っていることを解決のために何かご協力いただけませんか」と、ざっくりと聞いてしまうんです。それが逆に、企業さんからするとストライクゾーンが広過ぎて、結局は曖昧になってしまうのはいかんかなと思っています。「これをやって欲しい」と言われると、多分、企業側としても動きやすいんだろうなと思います。

そんな感じで、福祉に直結する企業さんとかでないと、具体的につながりにくいと、実際に感じております。

鈴木●ありがとうございます。持っていく方ですね。企業の良いところを上手く捕まえると、企業も力になってくれると思います。

企業の社会貢献活動費に、経常利益の1パーセントを予算に組んである企業もたくさんあります。ちなみに、例えば愛知県のトヨタ自動車は、経常利益の1パーセントを社会貢献に使おうということで、いろいろな貢献をしてるんですけど、1パーセントといっても300億円以上あるわけです。そういった企業とコラボレーションでき、地域に還元できることを提案していただけたら、多分、企業も動いてくるんじゃないかなと思います。

今日、せっかく川島先生に貴重なお話を聞かせていただいたので、川島先生から各分野の方々に、共生社会の構築のために、ワンポイントでもお話ししていただけると嬉しいなと思います。

川島●素敵なお発表でした。アドバイスというほどのことではありませんが、今までいろんな、開発的な新しい事例に取り組まれた方々のお話を、少しお話ししたいと思います。

どの分野の方でも共通だと思いますが、新たなことに取り組もうとすると、やはり今までの自分の殻に閉じこもってしまい、なかなか新しいことができません。かといって、大幅に踏み出すのは、それぞれの企業体や行政のスタンスがあって、枠組みを外すことはやっぱり難しいと思うんです。



そのときは、一歩とは言わないけれど、半歩ぐらい踏み出してみることで。そして相手も半歩踏み出してくれたら、さらに一歩前進するという感じで進めていくといいです。

先ほどの行政のお話の中でも、行政が具体的に話をすると、強制力が発動したりしてしまっていて、話しづらいということも、お話にありました。でも、そこをもう少しだけ、具体的に話をしてくれると、相手も動きやすいということがあります。そういう部分も半歩ずつの歩み寄りだなと思って、お話をお聞きしました。半歩ずつ、自分の殻からはみ出してみると、実は大きな一歩が踏み出せるかもしれないということです。

もう一つは、こうして新しい事例や取組をしていただいたとき、外に向かって伝えることがとても大事だと思っています。その伝え方ですが、ざっくりと事業として「こんなことをやりました」という伝え方はもちろん大事ですが、そこに関わっておられるお一人お一人の暮らしが、どう変わったのかというストーリーをお話していただくと、より人の心にとっても響いてくると思うんです。こんな素敵なお話をしてくれたよとか、こんな笑顔が増えたよというように。何

かモビリティの活動をして、今まで墓参りを諦めていた人がとても嬉しそうにされていたとか。そういうお話が、人の心を動かすと思うんです。

新しいことを地域で起こしていくとき、やっぱり人を動かさないといけない、人を巻き込まないといけない。そのとき、成果や自分の活動をストーリーで語ることができる。そんな「語り力」も、これからの地域共生社会に関わる一人ひとりにとって、とても大事なことなのかなと思いました。

鈴木●どうもありがとうございました。時間が来てしまいましたので、まとめということではないんですが、こういったいろいろな事例を踏まえて、コラボレーションして何かをやるっていうときには、3つのキーワードがあると思います。

1つ目は「実利」。実際の利益が増えることが必要だと思います。2つ目が「共感」。共に感じられることです。3つ目は「仲間」です。以上の「実利」「共感」「仲間」というキーワードを元に、いろいろな面で照らし合わせていくと、さまざまなコラボレーションの可能性が生まれ、成功に導きやすくなるのではないかと思います。

何かをしようとするとき、やっぱりメリット、実利が必要なんです。この相手と組むと、どんなメリットがあるのか。そんなことを考えながら、お互いの実利を求め合い、協働するということです。

そして、自分たちの活動を知らせる啓発も大切です。それを知らせることによって、共感が生まれます。まず知ってもらうということですね。ボランティアの世界ではよく「つながろう」と言いますが、つながただけでは駄目なんです。

今日の川島先生の講話にもありましたが、つながったら、今度はそれを実行に移すわけです。実行すれば必ず、何らかの課題が見えてきたり、新しい発見や新しいメリットが生まれます。そして、それらを必ず振り返り、悪かった部分の改善方法、良かった部分をより伸ばすためなどの評価・検証をします。その結果をみんなで話し合い、新しい提案を生み出し、そして更なる共感を得る。そのアクションを繰り返すことで、多方面で協働やコラボレーションが生まれてきます。そして、今まで全然できなかったことが、次第にできるようになるようになると思います。

今日は名古屋トヨペットさんの事例をたくさん紹介していただきました。名古屋トヨペットさんの小栗社長、「グリーンキャンペーン」という植樹活動や今回紹介していただいた「まちイチ活動」など、素晴らしい貢献活動を熱心に行っているらしいです。また、私も運営に関わっている「スペシャルオリックス」でも、名古屋トヨペットさんにすぐお世話になっています。

例えば、企業の持っている人材や物、お金という利点を、福祉施設の方でうまく活用させていただき、一緒にやってもらうとか、あるいは行政と組むことによって、行政が企業の力で、行政の信頼性が増すということもあると思います。

また、豊田市の太田市長は、私も昔、社会貢献活動も委員会のときに私と一緒に仕事をしたことがありますが、すごく熱心にいろいろなことを考えていただける市長さんです。そういった企業や行政のトップの方の考えで、その組織は大きく変わります。最後は「人」なんです。そんな人をいかにうまく捕まえるかということが、地域共生社会の実現に向けての、一つの知恵になるのではないかなと思っています。

では最後に、お三方から、一言ずつお願いします。

中島●今日はありがとうございました。この後、いろいろな交流ができるということで、それを楽しみにしております。

豊嶋●きょう発表させていただきました事例は、名古屋トヨペットでしか行っていません。他のトヨタさんとか、カローラさんなどの販売店では行っていないことです。ですので、名古屋トヨペットをどうぞよろしくお願いします（笑）。

江崎●私は豊田市の職員なので、豊田市での活動にしか、注力しがたい部分はあります。しかし、こういった参考事例を他の自治体さんにもお伝えするってことは可能です。また、私も他の自治体さんの事例を聞きたい部分もあります。よろしくお願いします。

川島●きょうは一日、本当にありがとうございました。これからのネットワークタイム、まさにこれからのつながりをつくるチャンスですので、ぜひ皆さん、名刺交換をよろしくお願いします。



ネットワークタイム



令和元年度 地域共生社会推進セミナー 日程表

開催日：令和元年 12月5日（木）午後1時30分～午後5時
会 場：アイリス愛知 2階 コスモス

時間	次第	内容
13:00	受付	
13:30～	開会	
13:30 ～14:30 (60分)	I 講 話	『地域共生社会の捉え方に関する一考』 ～気遣い合える森の住人として～ 【講師】 愛知教育大学 教育学部 教授 川 島 ゆ り 子 氏 川島ゆり子（かわしまゆりこ） 関西学院大学博士課程後期課程満期退学 博士（社会福祉学） 日本地域福祉学会理事、日本福祉教育・ボランティア学習学会理事、 日本社会福祉学会学会誌編集委員 愛知県社協コミュニティソーシャルワーカー養成講座講師、大阪府地域福祉コーディネーター 養成研修講師、その他講師活動や市町村での審議会委員等を多く務める。 『地域を基盤としたソーシャルワークの展開』（単著、ミネルヴァ書房、2011） 『地域再生と地域福祉-機能と構造のクロスオーバーを求めて-』（共著、相川書房、2017） 『しっかり学べる社会福祉③ 地域福祉論』（共著、ミネルヴァ書房、2017） 『持続可能な地域福祉のデザイン-循環型地域社会の創造-』（共著、ミネルヴァ書房、2016）他
(5分)	休憩	
14:35 ～15:45 (70分)	II 事例報告会	『きづかう・しりあう・やってみる～地域共生社会の実現に向けて～』 【コーディネーター】 愛知県社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会 委員長 鈴 木 盈 宏 氏 (公益社団法人スペシャルオリンピックス日本・愛知理事長) 【助言者】 愛知教育大学 教育学部 教 授 川 島 ゆ り 子 氏 【報告テーマと報告者】 「家庭・子どもを孤立させない保育所等の取り組みについて」 社会福祉法人明照保育園 理事長 中 島 章 裕 氏 「まちイチ活動の取り組みについて」 名古屋トヨペット(株)総合経営企画室担当 副課長 豊 嶋 洋 史 氏 「行政と社協による地域活動の立ち上げ支援について」 豊田市役所福祉部福祉総合相談課 主 査 江 崎 崇 氏
15:45 ～17:00 (75分)	III ネットワークタイム	～きづかう、しりあう、やってみるきっかけをつくる～ 福祉分野（公・民福祉の関係者）、産業（民間企業の関係者）、学校（教育・研究機関関係者）、官公庁（国・地方自治体関係者）、ボランティア、地域住民、NPO、自営業者等、参加者皆さんによる新たな出会いの場、新たなアイデア発見のきっかけづくりのための交流会。

（会場案内）会場へお越しの際は、公共交通機関をご利用ください。

令和元年度

「地域共生社会推進セミナー」

報告